

## 「ジュニア向け」の書評の字句に飛びついて

2月、3月は授業もなく冬眠中。

その3月も終わりが近づき目覚めの準備と思い、来年度の授業で話す目新しい情報はないかと「脳のはたらきがわかる本」が書評で目についてので購読した。

各学校で人と人の関係（コミュニケーション）の授業をする前提として、「自らは何者か？」を思考させるために、「脳の働き」に一時間ほど触れている。

毎年同じような話をするのは自分にも飽きがあり、目新しい情報を求めた訳。

かといって、難しい専門書では自分が理解・納得するには面倒だし、また、あまり専門知識では聞く方も面白くない思い、「ジュニア向け」の書評の字句に飛びついた訳。

あに計らんや、さしてそう学生に話したくなるような面白い目新しい情報はなかった。

ただ、脳には「免疫システムの機能もあり、ストレスや気分により免疫系を抑制し過ぎて結果的に病を患うことになることもある。笑うと免疫細胞の数も増えたり、機能が活性化することが研究によって解ってきている。」という内容は、昔からの「笑う門には、福来たる」ということに絡めて、「ポジティブに考えることが大事だよ！」と使えそう。

さて、脳については、最近の生命科学、分子科学、工学医療、等々でその働きは詳しく解ってきているようである。

でも、どんなに細かく脳の各部位の機能の働きが解ったからといって、その人は、その人の脳全体としてのハーモニーとして行動してることは、歴然とした事実。

言い換えれば、ある部位、機能にトラブルがあったところで、それらを含めその脳全体のハーモニーとしてのその人の行動。

療育、教育の側面から係わるということは、その人の行動を相手にすること。トラブルある部位の機能に係わることではないと思っている。

自分は、大脳半球の一方が殆ど形成されずに産まれた症例に接したことがある。

症例児はふらつきながらも数歩は二足歩行できたし、スプーンで自力摂食できたし、痛い時は「イテー」、気にいらぬ時は我々につばを吐きかけ「バカー」と発話もした。

こうした症例に接したからか、「脳の各部位、機能の何ならのトラブルが微細に解ったところで何なのよ！」と言いたくもなる（もちろん、疾患が治癒することは必要なこと！）。

一方の半球がなくとも、この症例のように行動しているのである。その行動が、症例児の存在であり、生活なのである。

我々は、トラブル部位の機能に関心が行きがちで、自らの未熟さの責任をそのトラブルに被せてしまうことがままるが、そうではなく、その人の存在、生活のより豊かさへ取り組みから決して逃げてはならないと思っている。

(2006年3月26日 記)